

## ガラモ場再生手法の検討について

藻場は魚介類の発生、生息場所としての機能を有するほか、二酸化炭素の吸収源として注目されていますが、沿岸開発や環境変化などにより減少しました。

藻場には砂地にあるアマモ場と岩場にあるガラモ場があります。アマモ場は水質環境の改善や再生活動により回復傾向にありますが、ガラモ場は回復傾向が見えず、再生手法も確立されていません。

水産研究所では漁業関係者が実施できる再生手法をとりまとめたガラモ場再生マニュアルの作成を予定しており、現在、ガラモ場再生の適地選定に関する試験研究を行っています。

具体的には、ガラモの一種であるアカモクを着生させたコンクリートブロック（以下「基質」）を天然海域に設置し、生育状況等を観察しています。同時に目合い3cmのトリカルネットで覆った基質も設置し、植食性魚類による食害への対策も行いました。

令和6年10月11日に瀬戸内市牛窓町地先に設置した基質を約1か月後に観察したところ、ネット無しの基質ではアカモクが食害に遭って茎部のみとなっており、同時に設置していた水中カメラには植食性魚類のアイゴが写っていました。一方、ネット有りの基質では食害に遭わず、アカモクは最大藻長9cmほどに成長していました。

令和7年6月26日に笠岡市真鍋島地先に設置した基質（写真1、2）を約1か月後に観察したところ、ネットの有無に関わらず両基質で最大藻長3cmほどに成長したア

カモク（写真3）と同時に、いくつかの食害痕を確認しました。さらに、その1か月後に観察したところ、ネット有りの基質でも5～8割程度のアカモクが食害に遭っていました（写真4）。水中カメラを設置していなかったため、食害生物の特定はできませんでしたが、食害痕からヨコエビ類または小型のアイゴによるものと推測されました。

これらのことから、事前に適地選定を行う際には、植食性魚類の摂餌活動が活発になる秋季以降だけでなく、初夏の6月頃からもガラモ場再生候補地に基質を設置し、食害圧の強度を調査する必要があると考えられました。

今後、これらの調査結果及び既往知見をとりまとめ、マニュアルの完成度を高めていきたいと考えています。

（海面・内水面増殖研究室：小見山）



写真1 R7年6月に笠岡市真鍋島地先に設置したアカモクを着生させた基質（両端）



写真2 基質設置時のアカモクの状況（最大藻長6mm）



トリカルネット無し基質

トリカルネット有り基質

写真3 約1か月後のアカモクの状況 (R7.7.17)



トリカルネット無し基質  
(葉状部が食害に遭い茎部のみ残存)



トリカルネット有り基質

写真4 約2か月後のアカモクの状況 (R7.8.21)